

◆ ロッシーニ 歌劇「セヴィリアの理髪師」序曲

まもなく創立 15 周年を迎えるブルーメン・フィルでは、最近いわゆる再演曲を取り上げる機会が増えてきたが、今回は初挑戦の 3 曲を並べたフレッシュなプログラムとなった。

ジョアッキーノ・ロッシーニ (1792-1868) は、モーツァルトが没した翌年に生まれ、イタリア・オペラ界を制覇した時代の寵児であった。

「セヴィリアの理髪師」はフランスの劇作家ボーマルシェによる戯曲で、モーツァルトによるオペラでお馴染みの「フィガロの結婚」の前段にあたる物語である。理髪師フィガロが策士として活躍する、貴族特権階級への諷刺含みの恋愛劇とでもいえようか。ロッシーニの代表作にして、今日でもしばしば演奏されるこのオペラ (1816@24 歳) だが、彼自身の手紙によると、たった 13 日間での作曲というやっつけ仕事だったらしい。なお、この序曲にはオペラ本編の素材はほぼまったく使われていない。というのも、自作のオペラ「イギリス女王エリザベッタ」(1815) の序曲として既に演奏されていたものをそのまま転用したもののなのだ。さらに別の自作オペラ「ひどい誤解」(1811)、「パルミーラのアウレリアーノ」(1813) でも同じ序曲を使っていたという。録音という概念がなく、楽譜が出版されていない限り音楽がほぼ完全な瞬間芸術であった当時ならではの現象だろうが、それだけ作曲者がこの曲を気に入っていたとも考えられよう。

序奏はホ長調の強奏にはじまる *Andante maestoso*。弦とファゴットによる穏やかな上行に、弦・木管の短い対話が続く。ヴァイオリンの優美な旋律にフルートが答える。

主部は *Allegro con brio*、ホ短調のソナタ形式。ヴァイオリンが軽快な第一主題を奏し、第二主題はオーボエとクラリネットのデュオ、ついでホルンによって歌われる。

コーダではロッシーニ・クレッシェンドによるいきいきとしたクライマックスが築かれ、盛大に曲を締めくくっている。

本日は、アルベルト・ゼッダ改訂版に基づきつつ、ロッシーニ自筆譜を参照したトロンボーンなし、ティンパニなしの譜面で演奏する。

(I.T.)

◆ レスピーギ ボッティチェリの三枚の絵

オットリーノ・レスピーギ (1879-1936) は、イタリアのボローニャ生まれの作曲家。代表作として大オーケストラの機能を駆使した交響詩「ローマの松」「ローマの祭」「ローマの噴水」がある。また、「リュートのための古風な舞曲とアリア」「教会のステンドグラス」「鳥」など、叙情的なメロディと色彩感あふれるオーケストレーションによって小編成ながら人気が高い作品も多い。

本作「ボッティチェリの三枚の絵」は、フィレンツェのウフィツィ美術館に収蔵されているボッティチェリの作品を題材として作曲された。ボッティチェリのみならず、ルネッサンス時代の代表作ともいえる絵画であろう (本作品のモチーフとなったボッティチェリの絵画については、プログラムに挟み込まれた別紙を参照して頂きたい)。ウフィツィ美術館は元来メディチ家の宮殿でもあった建物であり、メディチ家断絶とともに当時の政府にコレクションごと寄贈され、近代美術館としては最古の存在となった。なお、ウフィツィ Uffizi とは英語の office にあたる単語である。

第一曲はボッティチェリの代表作"La Primavera" (「春」、1477-78 : 題名は本人由来ではない) を題材としている。愛と美の女神ヴィーナスを中心に、左にヘルメス・三美神、右に春の女神プリマヴェーラ・花の女神フローラ・西風ゼフェロスが配されているこの絵画の主題解釈については諸説あり、15 世紀に描かれた絵画の中でもっとも難解とされている。

曲は喜びにあふれたトレモロによって開始され、「ローマの噴水」を思わせる金管楽器による跳躍音型が続く。コレッリやモンティヴェルディなど、イタリアバロックの要素も盛り込まれている。

第二曲は初期の傑作"l'adorazione dei Magi" (「マギの礼拝」、1475)。救世主イエスの降誕を告げる新星を発見した三人の「マギ」(ペルシアの僧侶階級のことで、ここでは賢者にして王を指す) が、エルサレムでヘロデ王にその出生地を聞いた後、星に導かれベツレヘムの地でイエスを礼拝する場面である。聖母マリアの繊細でありながら優美で洗練された線描手法は、ボッティチェリの作風の大きな特徴とされている。時の権力者でありパトロンでもあったメディチ家の主だった人物や当時の知識人などに加え、ボッティチェリ本人 (右下) までもが描き込まれている。

朗々としたファゴットソロが歌われると、フルート、ファゴットのデュエットによる"Veni, veni Emmanuel" (賛美歌「久しく待ちにし」)へと続く。グロッケンを従えたチェレスタの伴奏で奏されるオーボエのオリエンタルな旋律が「マギ」の登場を思わせる。伝承曲"Quanno nascette Ninno" (御子生まれし時)、17 世紀のナポリで作られ、転じてイタリアにおけるクリスマス・キャロルとして人口に膾炙する"Tu scendi dalle stelle" (星空から降りてくる) も引用されている。

第三曲はもっとも著名といってよい"La Nascita di Venere" (「ヴィーナスの誕生」、1485)。「La Primavera」(「春」)の対画としてメディチ家より発注された作品とされている。貝殻に乗り海から誕生した裸体の美の女神ヴィーナスを中心に、風に乗り、花を蒔きながら祝福する西風の神ゼフェロスとその妻、花の女神フローラが左側に配され、産まれたばかりのヴィーナスに絹の布を掛けようとする、時の女神ホーラが右側に配されている。「春」に描かれた着衣のヴィーナスが「世俗のヴィーナス」を、この裸身のヴィーナスが「天上のヴィーナス」を表すともされている。

穏やかなさざ波の音がずっと続くかのような 6/4 拍子の音型が続き、フルートとクラリネットが風のようなざわめきで呼応する。永遠を思わせる非常に長いクレッシェンドを経て全楽器によって E-dur に解決し、鍵盤楽器による昇華ののち、穏やかに曲は閉じられる。

レスピーギの作品にはキリスト教的世界と非キリスト教世界が組み合わされていることが多い。この三曲は絵画そのものから得られたインスピレーションに基づくものではあろうが、同時に西洋的文化背景が素地となっていることも見逃せない。

なお、筆者はこれらの絵画 (本物) を見たことがなく、団員の大部分も同様である。管楽器は各一本ずつ。ピアノ、チェレスタ、ハープを伴う小編成の弦五部によって構成されるなかなかの難曲であるが、百聞は一見にしかず、という至言がありつつもなおレスピーギにこれを描写せしめた絵画、あるいはその音楽にこめられた感動をわずかでもお伝えできれば幸いである。

(I.T.)

◆ モーツァルト セレナーデ第 9 番「ポストホルン」ニ長調 K.320

モーツァルトの生地ザルツブルクでは、毎年夏になるとある特別な音楽行事が催されていた。試験を終えて2年間の予備課程を修了するザルツブルク大学の学生たちが、「フィナーレムジーク（＝最後の音楽）」と称して、領主である大司教の宮殿と、教授や学生たちの集まる大学構内でそれぞれ大規模な管弦楽を披露するのである。また、学生たちはそれに加え、宮殿や大学へ向かう際には行進曲を演奏しながら移動することにもなっていた。多くの貴族や市民たちも見物に駆けつけたというこの行事は、当時のザルツブルクの夏を賑わす一大イベントであったという。1779年8月3日に完成された「ポストホルン・セレナーデ」も、そのようなフィナーレムジークの一つとして作曲されたものであったと推定されている。

この頃のモーツァルトは、ミュンヘンとマンハイムに続きパリでの就職活動にも失敗し、失意のうちに戻ってきた故郷ザルツブルクで再び宮廷音楽家（オルガン奏者）の地位を得て、仕方なしにその務めを果たしつつも、満たされぬ日々を送っていた。というのも、当時のザルツブルクは、新たに着任した大司教コロレド伯によって音楽活動が著しく制限されていたため、彼がのびのびと作曲に精を出せるような環境にはなかったのである。このことは、モーツァルトが前年のパリ滞在中に、友人に宛てて「ザルツブルクは僕の才能の生かせる場所ではありません」と書いていることからもうかがえる。

このように、決して恵まれていたとは言えない状況にあったモーツァルトであったが、宮廷オルガニストとしてしばしば教会ソナタ等の典礼音楽を作曲する一方で、一連の非常に魅力的な作品群も残している。おそらくモーツァルトの書いたものの中では最も有名なメヌエットを含む、ディベルティメント第17番ニ長調 K.334 や、最高傑作としても名高い、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調 K.364 など、これらはいずれもポストホルン・セレナーデと同年の夏に生み出されたものである。そして、ザルツブルク時代の最後を飾ることになったこれらの作品はどれも、前年の旅行の滞在先であったマンハイムそしてパリのスタイルをすっかり自分のものとした、モーツァルトの技と才能が如何なく発揮されているだけでなく、後年の自身の重要なレパートリーとなることがあらかじめ想定されていたのではないかと思わせるほどに、音楽的にも非常に充実した内容を持っている。

実際に、ポストホルン・セレナーデはかつて、第1、5、7楽章が抜き出されて交響曲として演奏されていたらしい。もともと、ひとくちに交響曲といっても、当時のいわゆる「シンフォニア」は演奏会の最初または最後に演奏される、いわば後年の「演奏会用序曲」のような存在でしかなかったのだが、いずれにせよ、残された筆写譜などからはこの曲がモーツァルトの生前からすでに、ザルツブルクにおける単なる機会音楽の枠を超えてウィーンにおいても演奏会のレパートリーとして存在していたらしいことがわかる。同様に、第3、4楽章も抜き出されて単独の「小さな協奏交響曲」としてウィーンで演奏されていたことがわかっている。

ちなみに、この曲の愛称の由来となったポストホルン（自筆譜では *Corno di posta*）とは、ポストという言葉が示すように、当時の重要な公共の足でもあった郵便馬車の到着または出発を告げていた一種の信号ラッパのことである。ただ管をぐるぐる巻いただけの単純な構造をしているこの楽器は、トランペットでもホルンでもない独特の、素朴で暖かみのある音色を持っている。郵便馬車の衰退とともにすっかりその姿を消してしまっただが、ドイツをはじめとした国々では廃れてしまった現在でもこのポストホルンが郵便局のシンボルマークとして採用されている。おそらくヨーロッパのひとびとにとって、この楽器は非常に身近な、そしてまた重要な存在だったのだろう。そんなポストホルンがこのセレナーデで（それも第2メヌエットの第2トリオだけのために）使われることになった経緯は必ずしも明らかではないが、例えばたまたま演奏をした学生の中にポストホルンの名手がいたとか、あるいはこれからおそらくは故郷への旅に出る学生たちに向けたモーツァルトのニクイ演出だったとか、はたまたモーツァルト自身のザルツブルクからの旅立ちを暗示したものなのではないか、などなど、さまざまに想像してみるのも楽しい。

I. Adagio maestoso – Allegro con spirito

盛大な夜曲の幕開けにふさわしい、短いが荘重な序奏と、きらびやかで祝祭的なアレグロ。息の長い、いわゆるマンハイム式のクレッシェンドが曲を大きく盛り上げる。

II. Menuetto: Allegretto

優雅でところどころ愛らしさのあるメヌエットと、フルートとファゴットの2重奏がかわいらしいトリオ。

III. Concertante: Andante grazioso

管楽器がフルート2本とオーボエ2本を中心に協奏曲風に展開する楽章。両端楽章とは対照的な室内乐的でおだやかな雰囲気がある魅力的。

IV. Rondo: Allegro ma non troppo

この楽章でもフルートとオーボエが主役となって、前の楽章に劣らずソリスティックな競演が繰り広げられる。

V. Andantino

それまでののびやかで明るい曲想から一転して、深刻な雰囲気を持つ緩徐楽章。

VI. Menuetto

最初のメヌエットよりも華やかさが増し、より祝祭的な響きを持つメヌエット。トリオも2つに増え（つまりメヌエットは計3回演奏される）、第1トリオではフラウティーン（今回はソプラニーノ・リコーダー）が、そして第2トリオではいよいよポストホルンが登場して彩りを加える。

VII. Finale: Presto

快活で、非常に澁刺とした雰囲気に満ちたフィナーレ。パリ風にフォルテのユニゾンで演奏される冒頭主題が印象的。

(W.N.)